

藏寺宮中 良奈

面側同

像來如迦釋

に拘らず、氣を以て勝ると云はれてゐる。性豪邁、一錢をも蓄へず、硯を嗜んで收藏千餘に至る。皆自銘、大半手琢であつた。著に硯史、南阜詩鈔等がある。乾隆八年、年六十一、自ら生壙誌を爲る。其の銘に曰く「知其生何必知死。見其首何必見尾。嗟爾生事類如此。」と。以て其の爲人を知るべきである（國朝畫徵續錄、臨鈐羅室書畫過目考等）。本圖は即ち款識に「丁未書」とあり、以て雍正五年四十五歳の作なることを明にし得るが、其の尙左以前壯年時の作品として觀るべきものがある。

圖は紙本淡彩、その用筆稚拙の如くして滋味津津たるものあり、朱赭草綠藤黃等を雜用せる賦彩また頗る雅致に富む。圖の上方隸書〇款に「艸堂藏菊圖。繞砌依闌曲作行。西亭破曉見新霜。我來似客花如主。一路將迺到艸堂。其二不向朱門點舞塵。蕭然松石自成林。孤寒也似看花客。難作金閨食肉人。其三不架花枝不上盆。居然邊幅不脩人。形骸土木愚倏忽。別是花中劉伯倫。其四兒子能粗竹外烟。獨憐抱甕少清泉。連朝略典荷衣盡。坼菊之苦灌漑爲難。以艸堂去河少遠而僮僕乏人也。積憾莫解。聊于畫中作當門溪橋以當過屠之嚼。正不嫌烏有子虛爲筆墨誑人耳。南邨居士乙巳詩丁未畫。」とあり、また草行書の題に「藏菊之役延兒勞動爲多。花時邀客具賞。余獨有袖手追陪。從佳後客後作維生詠耳。暇日作圖以與延兒。亦庶幾花史竹帛代彭澤翁出一具報功冊命也。呵々。南村又筆」とあり、下に「高鳳翰私印」「南邨書畫」の三印、前に「桐雲」の一印を鈐す。また題詩の前に布時、蒼佩の觀款あり、「三月二日久客南山乍還爲布時蒼佩同觀此筆。是日春寒其劇。飲酒數杯經醉矣。」とあつて、「高瑤」「蒼佩」の二印がある。又別

高鳳翰筆艸堂藏菊圖贊印（原寸）

に圖の右下隅に「不爲無益之事何以說有涯之生」の一印、左下隅に「西園圖書」「河上艸堂」の二印と「經郭審定」の鑒藏印がある。

一〇 釋迦如來像

奈良 中 宮 寺 藏

銅造 像高一七・八寸（五寸九分）

天壽國曼荼羅と如意輪觀音の寺、中宮寺に尙一つ秀逸なる誕生佛あるを知つた。こゝに寫影を掲げたのがそれであつて、最近上梓された中宮寺大鏡によつて紹介されたのが恐らく始めてであらう、從來不思議に餘り矚目の機を得なかつたものである。

像は鑄銅、通例の如く右手を舉げ左手を垂れ子立し、全體黒褐色に光り、右手掌には鍍金があつたと思はれる跡を纔かながら見る。體の下部に肌の荒れた部分があるが恐らく火中したものと考えられ、又右腕のやゝ不自然な曲方をなし手先の頭部に附着せるもその爲ではなからうかと察せられる。鼻先、右手指先を纔かながら破損してゐる。後頭部に光背を取付ける柄があるが光背はない。臺座、盤は失はれ、今は木製の假臺座に差込んである。

像容童相にして、軽く腹を出し脚を擴げて立てる姿勢は愛らしく、顔は微笑を含む中にも端嚴さを示し、又その素朴なる技法のうちにも一種の親しきをもつ、佛傳に云ふ七歩獅子吼の誕生釋迦像にいかにも適しい逸品である。しかして裳の短かい點等に朝鮮三國時代と稱する誕生佛に類似するを見るが、その扁平なる姿體、銀杏形の眼、仰月形の口、裳の褶襞の形式的にして硬直なる表現、古拙なる技法等に飛鳥期通有の特色を顯著に示して居り自からその製作時代を知り得るのである。

從來誕生佛としては東大寺藏のもの、善水寺藏のもの、大報恩寺藏のものそれに明治末年に盜難に遭ひ、失はれて今はない法隆寺舊藏のものが著名であり、更に近年悟眞寺藏のものが注目されるに至つた。東大寺像、善水寺像は天平期、大報恩寺は鎌倉期、法隆寺像は飛鳥期、悟眞寺像は法隆

寺像が經説とは逆に左手を擧げてゐる點相異はあるが、形式はゞ同じく飛鳥式の特色を具有せるものにして、生硬な點少く、柔味の加はつてゐることが窺はれるより白鳳期とも云はれてゐる。しかして本像は、悟眞寺像は勿論法隆寺像より、體軀の表現、面相硬直に、裳褶亦固く、技法古朴にして、これらより更に古きものたるを知り我國現存誕生佛中最も古きもの一つと思はれるのである。